OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小田嶽夫と杭州：「原体験」と「文学の出発」
Author(s)	何, 問民
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

小田嶽夫と杭州
――「原体験」と「文学の出発」――

何　問民

〈キーワード〉　小田嶽夫　中国体験　杭州時代　認識の変化　文学の出発

１．はじめに

小田嶽夫（本名：小田武夫、1900年－1979年）は東京外国語学校（東京外国語大学の前身）中国語科に卒業して外務省亜細亜局に入局し、1924年に外務省書記生として中国の杭州にある日本領事館へ派遣された。杭州で約四年間を過ごしたが、この体験は彼の生涯の創作に大きな影響を与えた。中でも杭州での経歴を題材にした小説「城外」（初出：『文学生活』創刊号、1936年６月）は1936年の第三回芥川賞を受賞した。生涯にわたって中国と強い関係性を持ちながら創作を行った作家小田嶽夫と中国の関わりは小田研究の重要な部分である。その中、最初の中国体験である杭州体験は重要な位置を占めている。

小田の作家としての出発は杭州領事館時代の1927年２月に小説「傷心の町」を発表したことである。1930年に外務省の仕事を辞め、筆名小田嶽夫で創作を行った。1934年９月に小説「日本学士蔡万秋」が『新潮』という商業文芸雑誌に発表され、小田は正式に文壇デビューした。そして芥川賞受賞作「城外」で、小田は作家として名が知られるようになった。

小田嶽夫の芥川賞受賞までの過程に関して先行研究を見ると、松本和也は『昭和一〇年代の文学場を考える：新人・太宰治・戦争文学』の「文学青年から芥川賞作家へ――小田嶽夫「城外」と支那」という節で、大量の同時代評論を参照することによって論じている。松本は昭和初年代から一〇年代までの小田の経歴を

「同人誌遍歴」、「転機」としての「日本学士蔡万秋」、「城外受賞」という三つの段階に分けている[1]。この分け方は恐らく適切だと思われる。しかし、松本の論は同時代評論を中心に「文学場」を論じることが目的であるため、作家の経歴及び認識、作品についての分析は行わなかった。従来の小田嶽夫研究を見ると、同様に芥川賞受賞前の経歴及び作品はあまり重視されなかった。

ほかには、小田と杭州の関係を論じた論文が二つある。一つは陳齢[2]が小田嶽夫、杭州、郁達夫三者の関連を考察し、小田の杭州と郁達夫に対する深い感情を分析した。もう一つは、項婉倩の『小田嶽夫の作品における杭州像』[3]である。小田の杭州を題材にした作品を研究対象として、風景、人物、歴史の面から杭州像を分析したもので、谷崎潤一郎など４人の訪中作家の作品における杭州像と比較して、杭州への郷愁、西湖への「トポフィリア」が杭州の自然や歴史などに対する描写と融合した形という小田の杭州像の独自性を検討した。

杭州領事館での経歴を小田の「文学の出発」、「原体験」[4]であるという奥野健男の指摘は適切であるが、具体的な分析はなかった。本論は小田と中国との関わりの一側面を提示するため、小田の文学と作家人生の基礎を構築したとも言える杭州体験に着目し、奥野健男の結論を踏まえて、私小説「青春流離」を中心に「原体験」の具体的な内容と、それらの体験が小田に与えた影響、特に心理学の理論を用いて、杭州体験が「文学の出発」に与えた影響を明らかにする。

２.「青春流離」の杭州体験

杭州時代から芥川賞受賞までの小田の作品としては、「支那生活の或る頁」(1935 年 11 月『海運』)、「春・西湖・流離」(1936 年３月 19 － 21 日『中外商業新報』) など杭州体験と関連するエッセイがあるが、これらには杭州体験の一部分のみが記されている。後年の 1965 年、「著者の「杭州もの」の集大成とも言える」[5]、杭州時代の生活を詳しく記した私小説「青春流離」(1965 年 11 月) が、『漂泊の中国作家』に収録されて公刊された。その中では、30 年代のエッセイの内容がほぼ同じ表現で書かれており、主人公「私」も作品の中で「小田先生」と呼ばれている。したがって「青春流離」は、小説でありながら小田の杭州体験をほぼそのまま描いた私小説と見なしてよい。

２－１．杭州での風物体験——西湖を中心に

1924年８月、小田が杭州に着いたのは夕方である。出札口で黄包車（人力車のこと）に乗せられた小田は「駅前広場の先の旅館らしい赤煉瓦造りの建物の軒につらなった電灯の淡黄色の光り」という日本とは違った異国の風景を見て、「何か真空のように鎮まった気配が、夢の国へでも来たような気持」[6]になった。しかし、小田は異国での仕事が好きではなく、杭州での生活は「やりきれなく辛かった」[7]。その時に救いになったのは杭州の美景である。特に西湖の風景は小田のエッセイと小説の中で最も多く言及されるものである。

小田が描いた西湖は、スポットの位置も明確で、地図的、あるいは写真的な特徴がある。小田にとって西湖の景色はかなり印象が深かったと考えられる。朝、「石垣の傍らに湖の方へ向かって立つ」と見える「油をひいたような静かな湖面」と「西側に楊柳の並木の植えられた白堤のしずかに延びた様」には、「嫋々とした趣」があった。「ああ、何て優美な、明るい景観だろう」と、小田は見る度に感嘆している。領事館時代の小田はよく「呆然と」西湖に「眺め耽る」のであった[8]。また、このような美しい西湖に沿っている細長い「湖浜公園」のベンチに、小田はよく腰をおろし、「日光を浴びて、浮々しながら」本を読んでいた[9]。このような美しい西湖は異国にいる小田を慰めた。

西湖を含め、杭州は「美しい山水があり、古都の風韻がある」[10]という印象を小田に与えていた。これ以外にも、杭州風景を絶賛した箇所はたくさんある。後に、杭州と西湖の風景を何度も作品に取り上げており、これらの風景は小田にとって非常に価値がある思い出であった。

２－２．杭州領事館員としての体験

杭州へ行く前から、小田は人間関係のことが心配で「心が重くなった」[11]。書記生として、在中日本人との交際は避けられないことである。その中でも、毎日会わなければならない領事は重要な一人である。

杭州に到着してから、領事夫婦は小田の入職を祝う食事会をした。小田にとって「何よりも彼らが真面目な役人夫婦」という印象で、「もう反撥を」感じてい

たのであった[12]。食事中の領事はよく「現在進行中の浙江の時局」や「領事館事務のこと」、また「自己の過去の任地での経験談」などの話をし、「気持は東京の友人たちとの間の文学的雰囲気から未だに離れられ」なかった小田は「いつも彼の話を上の空で聞いていた」[13]。文学青年である小田は役人根性を持つ領事が好きではなかった。後の「４－２」で詳しく説明するが、小田は文学青年である自分を抑圧した領事館生活に苦しんでいた。領事への反感はその苦しい生活への反感の代表的な部分である。後に排日運動で領事館の全員が避難する時に、小田の領事への反感がはっきり見られる。

> 警察署の二階で私は領事と枕を並べて寝ることになった。今までは領事とは、原則として事務所内で顔を合わせてさえいればよかったが、今は二六時中顔を突き合せていなければならなくなった。日々の不安も去ることながら、これが私にはもっとやり切れなかった。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965年、pp.129 ～ 130）

領事館員、あるいは公務員としての生活、特に領事が代表する、公務員としての避けられない交際相手との付き合いは、小田に苦しい体験を与えた。

また、他の日本人居留民との交際体験もよくなかった。「家族のやうに親しんでゐるもの」という予想と違って、小田は「表面的では笑ひ合つて話してゐても、蔭へ廻れば罵詈し、中傷し、讒謗しあふのであった」[14]ということも痛感した。杭州領事館館員として文学青年である自分を抑圧した小田は、領事や日本人居留民との交際でより苦しみを感じていた。

２－３．中国人女性との恋愛体験

小田の体験の大部分は受け身としての体験である。杭州での体験の中で、小田が自発的に体験したのは恋愛のみである。娯楽場所で出会った女性を除き、「青春流離」で主に記したのは一人のフランス人女性と二人の中国人女性である。これらの女性たちは小田の杭州生活に光をもたらした。晩年の回想録「人生を作る」（1976年）で、小田は５人の重要な女性に言及している。その中の二人は杭

州で出会った中国人女性である。一人はアマ（女中）の秀宝（桂英）で、もう一人は葛幽琴というお嬢さんである。秀宝（桂英）は受賞作「城外」のヒロインで、葛幽琴も後年のエッセイでよく言及されている。杭州での中国人女性との恋愛は小田の杭州体験の重要な部分である。

２－３－１．秀宝との秘密裏の肉体関係

秀宝は蘇州生まれで、小田が前任から引き継いで使った中国人の女中であり、「城外」「青春流離」では「桂英」という名前に変えられている。彼女は酒好きで仕事をしない夫と離縁しており、小田より六歳上の三十一歳であった。背丈が高くて、「顔全体のわりに鼻の小さく低い、鄙びた顔」で、最初に「何とはないやるせなさ」を覚えた。しかし、時間が経つと、小田の桂英（秀宝）に関する認識が深くなり、「北京語に近い言葉を操ることが出来たし、料理のつくり方も上手いと言えたし、それにこちらの気持をよく察して、万事にかゆいところへ手のとどくようなソツなさがあった」[15] と評価した。

或る日の夜ふけに、小田は桂英の寝所に「しのび入り」、「彼女の脂っぽい軀を抱」き、その後に「彼女の肉体が恋われて来」、小田は「ずるずる」と、「泥沼に落ち込むように彼女との本意でない関係を深め」[16] ていった。

桂英との肉体関係は続いているが、小田は疚しい気持ちであった。桂英は小田にとっては性関係の相手であった。この関係の転換点は二つの「死」である。一つ目は桂英の母親の死である。泣いた桂英を見て、「三十を過ぎてもいながら、こんな泣き方を彼女がしたのは、私にはひとつの驚異であった」[17] と、小田は性関係の相手ではなく、人間としての桂英を見た。その後、蘇州から来た桂英の娘、月銀を助けた。その理由を語る時に、「私と桂英との特別な関係」という表現を用いている。この時から、肉体関係は「特別な関係」になっていた。

二つ目は桂英が病気で死にそうになった時である。桂英が風邪をひいて肺炎になり、悪い状態が続いたとき、彼女を入院させた。入院のことを桂英に話すと、彼女は「死を宣告されたようにでも感じたらしく」、娘の月銀に「おばあちゃんの写真を見せて！　見せて！」と「金きり声でせがんだ」。桂英は写真を見て、「ああ、おばあちゃん、わたしもあなたのそばへ行きます」と言い、「子供がわ

めくように嗚咽の声を挙げた」。小田は「ふと桂英の死の影を見たような気持がして、一瞬ぎょっとからだを硬直」させた。「何ゆえ桂英は死なければならないか！　何ゆえ月銀は孤独にならなければならないか！」と思い、小田は「涙の抑制なく顔じゅうへ氾濫するのにまかせた」。悲しくなって洗面室へ身を避けた小田は「隣室を気づかい、声を洩らさないように、全身の力で息を殺した」[18]。その時の桂英の状態と悲しい月銀の姿が小田に与えた刺激は大きかった。

> 私は彼女にこの病気の事件があるまでは、彼女をただよく役に立つ使用人、そして私の肉欲の要求にも応じてくれる便利な女ぐらいにしか考えていなかったが、今では自身が意識していたよりはずっと深く、彼女とのあいだに精神的なものもあるらしい、と、頭でではなく、身体で感ずるようになっていた。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.112）

これで、身体面と精神面の両面で桂英への認識が深まった。幸いに桂英は一命を取り止めたが、退院後衰弱状態になっていた。「二人が、死にもせず、孤独に取り残されもせず、今まで通り睦まじく話し合うことが出来ている幸福」によって、小田も「大きな幸福を意識させられ」[19] た。

その後も、桂英との秘密の肉体関係が続いていた。1928 年、小田は帰国許可を取った後、お金を全て桂英に与え、商売をしたいという彼女の計画を支持しようとした。桂英母子が今後「平穏」に生きていけることを「熱望」し、小田はその計画を胸に秘めていた桂英に「感動」を覚える[20]。最終的に、小田が帰国する前に桂英母子が先に杭州を去ることになった。別れの場面は「あっけなく終わった」。「感傷的」ではなくて「意外」だが、小田は「快かった」[21]。

後年の回想録「人生を作る」では二人の関係を略したとしているが、小田は「孤独、寂寥の朝夕」を慰めた桂英に対しては「どんなに感謝してもし切れない」[22] 気持ちを表している。

２－３－２．憧れの女性――葛幽琴

> 私は異境流離の寂寥に堪えかねて、はしなくも桂英と秘密の関係を結んだのだったが、それでも満足はできず、磁石にひかれるように今はひたすら葛家へ心を吸い寄せられるのであった。(「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965、p.133)

このように小田はすでに桂英と肉体関係を持った後、葛家の長女の幽琴にも惹かれていた。葛家は小田が通訳と一緒によく遊びに行く中国人の家である。小田はよく麻雀をやるため葛家に行く。

幽琴は非常に静かな、あるいは寡黙な人であった。幽琴が後ろに立って小田の麻雀の牌を見るとき、牌が良くないと「焦らだった」[23]。小田は幽琴が弾いたオルガンの音を聞くだけで「満足しようと、自身で自身を慰めるのであった」[24]。

しかし、小田は葛家の人たちと直接言葉を交すことはほとんどなかった。幽琴との交流も少なかった。特に記されたのは二回のみである。一回目は偶然に幽琴を見た時である。小田が幽琴の美しい姿にひかれていた。その後、幽琴と直接交流出来る機会があった。或る晴れた日曜日に、幽琴と妹の幽蘭（葛家の次女）が小田の官舎の戸口に姿を見せた。小田は胸をときめかせて二人を迎えた。小田自身も無口な人で、杭州語もできず、二人を長く引き止めるために、ピンポンに誘った。幽琴とピンポンをすると、幽琴の打ち返して来る球が小田の「バットに当たる手ごたえ」に小田は「何か彼女の軀に触れでもするような」感触を感じた[25]。その後、小田の幽琴にたいする感情は、「はっきり恋」になっていた[26]。

肉体関係のみの桂英と違って、小田は葛幽琴との結婚も考えていた。通訳を通して、幽琴の父親に彼女との結婚を申し出たが、葛家は「いつまでも杭州にいるならばよい」[27]という要求を返事した。その要求に応じるなら、「私は勤めを止めることは出来ない。文学への望みは捨てないとしても、それは半ば趣味的のものになり、文学生活を営むことは断念しなければならなくなる」[28]と思い、最後に「故国の生活を捨てることが出来ない」と決意し、幽琴との結婚を諦めた[29]。

小田と幽琴の恋愛は失敗してしまった。実際に付き合わず、肉体関係も持っ

ていず、小田の幽琴への片想いは精神面に止まっていた。1956 年、中国文化訪問団の一員として中国各地を巡り、28 年ぶりに杭州に行った。昔の日本領事館に行って、胸が「高鳴った」小田は、「葛家の令嬢幽琴にあこがれの胸をふるわせた」[30] と、その中で幽琴に対する強い感情を表明している。28 年が経っても、小田は幽琴のことが忘れられなかった。

上述したように、小田は肉体面と精神面の両面で恋愛を体験した。杭州での中国人女性との交際は小田文学の重要な素材となっている。

２－４．浅い戦争体験

小田は 1924 年から 1928 年までに杭州領事館で働いていたが、その時期は北伐戦争（革命軍が北洋軍閥をを打倒するための戦争）の一時期と重なっている。1927 年２月、福建省路線を進んで来た革命軍が杭州へ迫って来た。

> そんな状勢の最中であったが、日曜日のことで、私が官舎の前のベランダでぼんやり煙草を吸っていると、劉通訳が前の道を駆けて来て、
>
> 「敗残兵が追っかけられています！追っかけられています！」と叫んで、石垣のふちへ寄った。
>
> 私も駆け出して劉のそばへ行った。崖下の道の向い側にある中国人の邸宅の向うの、湖岸の細い道を、灰色の、木綿の綿入れの服を着た一人の敗残兵が、重そうに銃をひっさげながら、よろよろした足取りで、併し必死に白堤のほうへ向かって駆けている。すぐに彼は白堤の入口へ出たが、白堤へは入らずに、四、五人の手に銃を持った、普通の長衣をつけた男の姿が、敗残兵が通ったのと同じ道へ現れた。そして又すぐに消えた。
>
> 「革命軍の便衣隊です、便衣隊です」と劉が呟いた。
>
> 「もう秘密に這入っていたんだね」と私が言っているとき、便衣隊の姿が消えた方向で、パン、パン、と二つほど銃声がした。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、pp.114 ～ 115）

大規模の戦争場面ではないが、小田は「はじめて戦争をこの目で見た」[31] ので

あった。ただし、小田は直接の殺人の場面を見ていなかった。また、「杭州市民の苦しんでいた」[32]ことは見ていた。

そして、翌日に小田は革命軍の入城を見た。

> 向い側のむさ苦しい民家の前に、二十人ぐらいの兵隊の列が立っていた。何をしているのかわからなかったが、兵隊の一人が屋内へ入っていたようである。汚れ煤けた青天白日旗を先頭にいる兵士が支えていた。みんな痩せて小柄で、色が黒く、目がぎょろついている。まわりの連中はみな晴れやかな笑いを顔に浮かべた。私はそのまま街へ様子を見に出かけた。(「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.115)

小田はこの場面、また、街の家々の軒先に青天白日旗が飾られている景色を見て、「何か目を洗われるような新鮮な景観」[33]であると思った。

一方、小田は戦争のネガティブな面も間接的に体験した。ある日、酔っ払った革命軍の将校がピストルを持って領事館に入り、敗残兵がいるかどうかを確認しようとするということがあった。無事に終わったが、後にピストルに弾丸が詰まっていたことを考えた小田は「ぞっと背筋を寒くされた」[34]。また、他の日に、三人の小柄な青年の便衣隊が領事館に来、小田と無言に応接間で座っていたこともあった。最後に出ていった後、小田は「何だ、へんな奴等だ」と言ったが、「内心はほっとした思い」[35]であった。

このように、小田は中国の革命軍の北伐を通して戦争をある程度体験したが、殺人の場面を見ていなかったし、戦争も日本人が対象になっておらず、酔っ払った革命軍や便衣隊とも衝突がなかった。後節で詳しく説明するが、この浅い戦争体験は文学の素材となり、小田の中国の現実への認識にも影響した。

２－５．学生の示威行列と排日体験

1925 年 5 月 30 日に、中国人労働者を殺した日本の工場に抗議するため、上海の学生たちが上海共同租界でデモ活動を行い、租界警察に逮捕された。その日の午後、逮捕された学生を解放させるため、数多くの中国人が租界で集まってい

た。それに対して租界警察が発砲し、学生・労働者に 13 人の死者と 40 人余りの負傷者が出た。この事件は五卅事件（五卅惨案）と呼ばれている。

杭州にいる小田はこの事件の報道を見た。杭州市内各学校の学生の、上海の事件に応じた大示威行列が行われた。その示威行列は領事館前を通る筈であった。最初に小田はそれほどには心配しなかった。しかし、「今回の行列は三千人ぐらいに上ってい、空前の大規模のもので、その威勢も従来のとはちがう激しいもの」であり、小田は「ようやく不安な気持」になった[36]。

その日の 11 時頃に行列は小田がいる領事館の近くまで来た。「人群」が「澎湃として怒涛のよう」であった。「打倒帝国主義」、「撤廃不平等条約」、「回収租界」などの標語を声高く斉唱し、小旗を力強く振った。「何本かの小旗が鳥のように舞い上がって来」て、「人群」が領事館構内へ入った。小田は「中国学生たちの愛国の情熱に感動したのかも知れない、そうではなくて自身何か悲壮感を覚えたためかも知れない」と思い、「瞼に涙があふれた」。「学生の闖入して来るのを待ち構える姿勢」で、「恐怖と不安のなかにいつまでも立ちつづけ」、「斉唱の声も足音もようやく遠のいて行った」。今回の学生運動のことは「一つの痛切な経験」で、小田に恐怖と不安を感じさせたが、直接小田や日本領事館を対象にしていないからか、「客観的には私はそれほどの事件」と思わなかった[37]。

1927 年３月、革命軍が南京に入城した。一部の軍人と民衆は日本領事館に突入し、日本人居留民と衝突があった。小田は「われわれの領事館も襲撃を受けるのではないだろうか」[38] という心配もあった。その後、領事館の全員が租界へ避難した。杭州に戻った後にも混乱が続いた。

1928 年５月３日、小田が日本に戻る前、山東省の済南で五・三惨案（日本では済南事件）が発生した。国民革命軍と日本軍の間に武力衝突があり、後に日本軍が中国人交渉員の 17 人を虐殺した。

> 済南の日本軍暴挙の事件は、翌日の杭州の新聞に大々的に報道され、当然それは排日運動を誘致した。例によって日本領事館前への示威遊行が行われたが、今回は学生たちは示威遊行よりは街での排日演説に主力を集中し、執拗にそれをつづけた。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、

p.147）

その後、中日関係がますます悪化し、排日運動が盛んになり、小田は街へ出るときに「学生の排日演説をぶっている姿」を見かけた。しかし、小田の観察によれば、「もう聞き馴れてしまったためか、立ち止まって耳を傾けている聴衆はめったにいなかったが、演説者はしきりに手を大仰に動かし、絶叫的調子の金切声を張りあげていた」。杭州での排日運動はあいかわらずつづいていたが、「一応山場は過ぎた状勢」であった。小田は中日関係が悪くなる途中で、杭州を去った。その時、小田は「日本人の姿が人目に立つことは極力避けなければならない」と思い、「劉通訳一人を伴侶に、朝早くこっそり駅へ向った」[39]。小田は排日のことを意識していたので、「日本人の姿が人目に立つこと」を避けたのだろう。小田は杭州で、主に中国の学生運動（示威行列や演説）を「痛切な経験」として体験した。

以上、小田の「原体験」、杭州領事館員としての杭州体験を、「青春流離」を中心に整理した。次章は「原体験」のもう一つの面、杭州体験における認識について論じる。

３．杭州体験における新たな認識

田中栄一が指摘したように、杭州時代は小田の「文学への開眼がもたらされた時期」[40]である。一方、杭州で戦争を間接に体験し、学生の示威行列と排日運動を直面し、小田は中国、中日関係、中日関係における自分の位置なども認識し始めた。

当時戦乱で半植民地になっていた中国は良い状況ではなかった。中国の「内乱状態が突発」し、「附随して領事館業務が急増」し、「馴れない」小田には「到底手に負えないからであった」[41]。1926年7月、蒋介石の国民革命軍が北伐をはじめ、「この新事態」[42]が小田の関心をそそった。革命軍が入場する時に小田は民衆の反応[43]を見ていた。群衆が若い将校を見る目は「小児のように初心（うぶ）初心しくかがやいていた」。本部隊の入城と共に、お祝いの爆竹も鳴り始めた。小田は「青年たちの心は、急速に革命軍に向って行った。革命軍の政治部に入ること

が、彼等の理想になった」と認識した。さらに、当時の服装の変化や女子学生の断髪などを見て、小田はそのときの中国人の革命への熱情をより深く認識した。その時の小田も革命軍に好感を持っていた。革命軍の入城場面を見て、「何とまるで暁のように清清しい感じではないか！　ああ、偉大なことが成されている」と小田は思っている。後の回想録で、小田は「革命というもの――その底にあるヒューマニステックなものには多分に心を引かれていた」[44]と、この好感をより明らかに記している。

一方、中国人を見るたび、小田の自分の日本人官吏としての身分への認識も深まった。五卅事件の示威行列を見た小田は次のように思っている。

> 私は彼等を憎んでいない、むしろ愛している、と。そう思うと私の心は安らいだが、すぐにその平安が崩れた。―「何を言ってやがるんだ、お前は帝国主義の日本国家から派遣されてきている官吏ではないか！」そういう声がどこからか聞こえて来た。私はそれにちがいないと思った。しかも私が中国人を愛していることに偽りはない、と私は思った。私はその矛盾に苦しんだ。私は彼等にどう言えばいいかわからなくなった。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.98）

矛盾と心の苦痛を表した文章である。小田は学生運動に感心し、自分の日本人官吏という身分を意識して、矛盾を感じていた。しかし、この時、日本が直接の抵抗の相手になっていなかったため、矛盾は感じたが、小田は深い認識はなかった。さらに、中国民衆を見た小田は、次のようなことも記している。

> 私は内戦のために杭州市民の苦しんでいたのをじかに見たり、又、貧民があまりに多く、その彼等が永久に浮かぶ瀬が無く、虫けらにも等しいみじめな生活を送っているのを見て、かねがね中国民衆に多分の同情を抱いていたので、この中国改革のために闘っている革命軍および革命政府にたいしては、中国人にも劣らない期待を抱いていた。中国が独立国の実を具え、中国人の生活がよくなるためには、日本が或る程度不利になることぐらいは、已

むを得ないこととも思っていた。(「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.126)

小田は中国民衆に同情し、革命の成功を期待した。引用文の表現から、公的な面で、小田は中国と日本の立場の違いを認識したことがわかる。

また、小田は日本人官吏として、中国人との交流がうまくいかなかった経験もあった。「相手の中国人にいかほど好意を抱いてい」ても、「先方が心の紐を締めるのを怠らない、という場合」を「しばしば」[45] 経験した。この立場の違いへの認識を深くさせたのは、南京事件であった。

この南京事件は私たちを恐愕させた。革命軍にたいして抱きつづけて来た私たちの信頼は一朝にして潰滅した。私たちの頭にすぐ来たのは、われわれの領事館も襲撃を受けるのではないだろうか、ということであった。(「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.129)

それは直接的な中国と日本の間の衝突である。中国と日本の深刻な葛藤は徐々に表に出るようになり、排日運動も盛んになっていく時期である。その時、小田は杭州を離れて帰国した。

田中栄一は小田が杭州時代で目撃した「内戦による民衆の惨状」は、「正義・反骨の精神を刺激し、国家、歴史、運命等の広い認識へといざなった」[46] と結論づけている。それは正確だと考えられる。中国人の革命を肯定し、中国人民衆に同情を抱いた小田は、公的な面で、中国政府と日本政府、中国人と日本人官吏の矛盾を認識した。しかし、その認識は「広い認識へといざなった」という段階に止まり、特に植民地となった中国と中国を占領しようとする日本の深刻な矛盾及び中国民衆の排日気分に関する浅い認識は 1937 年３月、二回目の中国訪問(上海)を通して変化することになる。

４．杭州体験と「文学の出発」

杭州体験は小田の「文学の出発」とも関連している。杭州から帰国した後、小

田は作家という理想自己へ接近しようとし、文学の道を出発した。この選択をしたことに杭州体験は影響を与えていた。現実自己は現在の自己である。理想自己は「なりたい自分という接近したい自己」、いわゆる「正の理想自己」と、「回避したい自己像」、いわゆる「負の理想自己」の両面がある。「自己不一致」から一致となるためには、「正の理想自己と現実自己のズレを小さくさせるという接近システム」と「負の理想自己と現実自己とのズレを大きくさせるという回避システム」がある[47]。それを究明するため、まず小田の現実自己を明らかにしなければならない。

４－１．杭州体験と小田武夫の現実自己

晩年の回想録「人生を作る」[48] で小田は自分と文学の関わりを記述した。文学が好きになったのは中学の三年生ごろで、一時期『文章世界』に短歌を投稿することがあった。後に「小説家になることを空想し、早稲田大学の文科へ入りたい」と思ったが、父のいない家庭にとって、私立大学の高い授業料と文科の６年間の受講時間を考えて、小説家志望をあきらめて「貿易の仕事にでも従事しよう」と決めた。英語科に合格できず、結局東京外国語学校中国語科に入った。中国語科時代、孤独を感じていた小田は文学に対する愛情が深く、常に文学に関心を持っていた。しかし、文学創作の段階には入らなかった。1922 年に卒業した後、小田は外務省亜細亜局に入局した。よく遅刻する小田は、仕事に抵抗があった。外務省で働き、文学に近づけず、小田は実存的な虚しさや不安感といった「砂を噛むような索漠とした」[49] とした気分を抱いていた。そして、杭州領事館に派遣する辞令を受けた後、小田はさらに「煩悶」していた。

> と言って中国行を拒否する口実が私には無い。私は観念して、出かけることにした。杭州は南宋の旧都で、世界的に名高い西湖のほとりの町ではあり、異境生活の経験も何かのプラスになるかもしれない、と無理にそう思うことにした。もともと私は漠然とながら中国に興味を抱いたので、外語の中国語科に学んだのだったが、今は中国よりも何よりも文学に心が向いていたのであった。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p.66 －

67）

ほかのエッセイにも、杭州に赴任する前の、「もう文学を語る友がいなくなる、文学に精を出すことが出来ない」[50]という不安が繰り返し記されている。

この時期の小田に関して、最も注意すべきことは公務員という現実の自己と作家という理想の自己の分裂である。つまり、小田は自分のアイデンティティーに関して混乱しており、異国赴任でさらに分裂による混乱と不安が深刻になっていた。杭州領事館時代の最初の時期の自分の状況について、小田は次のように語っている。

> それにしてももう私は本来の自己を大きく殺していることは事実であった。（略）私のじかの人間を出していたのでは、しょっちゅう衝突が起きるのは必定だ、いきおい私は機械にもならず、一方自己の意志、感情をありの儘に表白するのもできるだけ避ける、――つまり、曖昧模糊とした表現を取ることに努めるのだったが、併しそれがいつもうまく行くとは限らず、そこに時にはいくばくかの程度に領事との妥協が起るのであり、それが私にはやり切れなく辛かった。（「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965年、p.71）

これは小田が杭州領事館で働き始めた頃の自己認識であり、小田の精神面の危機が表されている。小田の認識によれば、杭州にいる最初の自分のアイデンティティーは不完全であると見られる。自分の隠した部分を出すと「衝突」が起きると思った小田は、自分のアイデンティティーを抑圧していた。杭州時代初期の小田は、杭州へ行く前の分裂という問題が続いており、自分のアイデンティティーの認識と現実の生活状態の差が大きかった。

さらに、前節で示したように、公務や、領事館員として避けられない付き合いで苦しんでおり、「何か宙に浮いたような頼りない、雑駁な心の状態で、すっかり文学から離れていた」[51]という状態であった小田は、文学青年としての自分を抑圧し、文学から逃避するように文学を読まないようになっていた。また、幽琴

との結婚も「文学か恋か？」という選択が潜んでいた。幽琴との結婚が暗示する異国で文学を捨ててお金を稼ぐ生活は、小田の回避したい生活状態である。もし結婚が成功したら、小田の「自己を大きく殺している」という現実自己は「回避したい自己像」と重なることになる。自己同一性の達成への渇望が、異国にいる寂寥や空虚と混合し、小田の分裂と抑圧はより深刻になったと考えられる。この時の自分の状態は「島流」[52]と呼んでおり、杭州体験を通して現実自己への嫌悪感が深くなった。それは小田の文学への決心に影響があると考えられる。

４－２．作家小田嶽夫への影響

小田の理想自己は「文学ひと筋の生活」[53]をする作家としての自己である。杭州体験は小田の理想自己へ接近する決心にも積極的な影響も与えている。

小田が以前に試作したものは「かなり自然主義的傾向の強いもの」であったが、「杭州という山紫水明の地からの影響」で、その後に「多分に叙情的なものに変わっていた」[54]と小田は自ら評価した。さらに、杭州で一人でものごとを見たり、考えたり、自分の心と対話したりすることが多かったからかもしれないが、小田は心境小説[55]に目を向けた。

また、中国語科を卒業した小田を含め、古典中国に憧れた多くの日本人作家にとって、杭州はまさに詩的、伝統的な中国を追い求めるのにふさわしい場所である。小田は西湖、あるいは、杭州と関係する中国の古典をよく読んでいた。「青春流離」の中には、白楽天、蘇小小などに関する物語が詳しく記されている。風景を見ながら、古典文学における古い中国を想像し、強い印象を受けた。小田は古典中国を想像させる杭州の風景が好きである。また、小田は杭州や西湖についての物語類の中国文学も読んでいた。蔵原のすすめで小田も『葡萄園』の同人になった後、杭州での実体験に基づき、小説を書き始めた。最初の作品「傷心の町」（1927年２月）は杭州の街を舞台にしている。その後も小説とエッセイを次々と書いていたが、当時はただの群小同人雑誌作家の一人として見られ、評価されなかった。

杭州領事館から日本に帰国した小田は日本の空を見ながら、「思いは遠い中国大陸へ走る」のであり、「郷愁」を感じ、「夢見ているところから来る楽しさ」[56]

があったと記している。時間が流れても、美しい杭州は小田の記憶の中で褪色しておらず、より鮮明になっており、小田の作品の中で繰り返し描かれることになる。お酒を飲んで、よく杭州の風景や杭州のことを思い出していた[57]。

1934年、小田は、杭州を舞台にし、中国人を主人公にした一人称小説「日本学士蔡萬秋」の原稿を新潮社の楢崎勤に持ち込んだ。９月、遂に同人雑誌を超え、「日本学士蔡万秋」が商業文芸雑誌『新潮』に発表された。小田文学と中国の関係が深くなり始めたのはこの時期だと見られる。松本和也の研究は小田の同人誌経歴と成功の過程を明らかにし、この商業雑誌デビュー作の「日本学士蔡万秋」を「転機」として位置付けている。同年11月に、倉橋彌一は「同人雑誌に據る人々」[58]の中で小田嶽夫について、「「新潮」に『日本学士蔡万秋』を書いた支那通の小田嶽夫氏も「世紀」[59]の持つ優秀な作家」だと評価した。ここで「支那通」は重要なキーワードであろう。小田文学の中国要素が評価され、一つのシンボルとして見られ始めたのだろう。小田も自分と中国の関わりを「この当時の私の生活の中に、他の同人たちにはない独特なものが一つあった」[60]として記している。しかし、当時「日本学士蔡万秋」について、他にも色々な評論があったが、結局この小説は好評価を得なかった。そのために小田の「名誉挽回しなければならない」という意欲が強くわき、「独特な」中国要素に焦点を当て、「杭州時代の生活」[61]を書き始めた。この「独特なもの」を発展させた結果は芥川賞受賞作「城外」である。そして受賞で、ついに作家としての位置を確かなものにした。

さらに後年、戦争、疎開、貧乏、親友の死などの人生経験が重なると、杭州は小田にとって戻れない故郷となり、小田の記憶の中で「夢の国」へと理想化されていく。後年の「望郷」（1964年）や『断橋の佳人』（1978年）などの数多くの作品にも杭州体験の影響が見られる。杭州体験は作家小田嶽夫の「文学の出発」であることは確実である。

５．終わりに

本稿は1924年から1928までの杭州体験を具体化し、杭州体験によって小田が得た新たな認識と、杭州体験が作家小田嶽夫（小田武夫）の理想自己への接近過

程に与えた影響を明らかにした。杭州へ行く前に、作家などの文学と関連する仕事ができず、外務省の公務員になった小田武夫の理想自己と現実自己は分裂していた。その後、杭州赴任でこの分裂とアイデンティティーへの抑圧はより深刻になった。小田は杭州で、西湖が代表する美しい風物、領事館員としての生活、戦争、学生の示威行列と排日運動、また中国人女性との恋愛など様々な体験をした。先行研究で指摘されていたように、それは小田の「原体験」であり、「文学の出発」でもある。異境で寂しさや苦痛に溢れていた小田の寂しさを癒したのは杭州の風景と文学である。さらに、杭州体験は小田の初めての中国体験であり、中国の現実、中日関係などの問題に関する小田の認識にも大きな影響を与えた。その認識はその後の三回の中国訪問にも影響が続いた。

杭州での経歴と杭州体験を通してもたらされた認識は初期の小田の創作の源とも考えられる。中国との関わりは小田の「独特なもの」であり、評価される特徴である。これはその後の彼の小説にも反映されていく。この点については稿を改めて詳しく論じることにするが、本稿の最後に簡単に紹介したい。例えば、1934 年『新潮』に発表された、日本に留学して帰国し、中国の復興という理想を持つ知識人階級の蔡万秋の憂鬱をテーマにした小説「日本学士蔡万秋」は、現実と理想の分裂、及び中国の現状に苦しんでいる中国人知識人の生き方の問題に重心が置かれている。この分裂のテーマは小田が杭州時代に体験したことであり、中国の現状と蔡万秋の認識に小田の杭州体験と認識も投影されている。また、主人公重藤陽一と中国人女性桂英の恋愛関係を描いた芥川賞受賞作の「城外」にも、肉体関係から精神の愛への変容過程が書かれており、前述した作家小田のアイデンティティー問題と認識が小説に書き込まれている。

このように、先行研究を踏まえて、本論文は杭州体験の具体的な内容を提示し、それらの体験は小田の認識と作家人生に与えた影響を明らかにした。それは小田の対中認識の基礎を作り、中国の現実、日本の現実及び中日関係について深く考えるという小田の姿勢にも影響した。その姿勢に潜んでいることは小田の第二故郷となった中国と文学の素材である中国への関心と愛情である。初期のみではなく、時間が経って杭州は小田の心の中で昇華していく。後の上海体験、北京・満洲体験の時にも杭州体験との比較が行われ、杭州体験は小田の身体の一部

分になっていた。亡くなる前の晩年の小田は、杭州を逃避の場所、憧れの場所にしていた。杭州体験は小田の最初の中国体験であるとともに、最後に心に残った中国体験とも言える。

注

1 松本和也（2015）「文学青年から芥川賞作家へ――小田嶽夫「城外」と支那」『昭和一〇年代の文学場を考える：新人・太宰治・戦争文学』有斐閣、p.36.
2 陳齢（2002）「小田嶽夫と郁達夫――杭州との関連を中心に」『名古屋大学中国語学文学論集』（14）、名古屋大学中国語学文学会。
3 項婉倩（2018）「小田嶽夫の作品における杭州像」杭州師範大学（修士論文）。
4 奥野健男「解説」、小田嶽夫『望郷』学習研究社、1964 年、p.351.
5 小田嶽夫（1965）「あとがき」『漂泊の中国作家』現代書房、p.283.
6 小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965、p.68.
7 同上、p.71.
8 同上、p.73.
9 小田嶽夫（1964）「杭州西湖畔で」『文学青春群像』南北社 p.27.
10 小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 p.89.
11 同上、p.67.
12 同上、p.69.
13 同上、p.71.
14 小田嶽夫（1937）「春・西湖・流離」『支那人・文化・風景』竹村書房、p.96.（初出：1936 年 3 月 19―21 日『中外商業新報』）
15 小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、p.80.
16 同上、同頁。
17 同上、p.94.
18 同上、pp.111―112.
19 同上、p.113.
20 同上、p.142.
21 同上、p.143.
22 小田嶽夫（2000）「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、p.27.
23 小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 p.132.
24 同上、p.122.

25　同上、p.125.
26　同上、p.134.
27　同上、p.140.
28　同上、p.135.
29　同上、p.141.
30　小田嶽夫（1965）「杭州彷徨」『漂泊の中国作家』現代書房、p.172.
31　小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 p.115.
32　同上、p.126.
33　同上、p.116.
34　同上、p.119.
35 同上、p.120.
36　同上、p.97.
37　同上、pp.97-99.
38　同上、p.129.
39 同上、p.147.
40　田中栄一（1999）「小田嶽夫論」『国文学　解釈と鑑賞』（64）、p.16.
41　小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 p.70.
42　同上、p.102.
43　同上、pp.116-118.
44　小田嶽夫（1964）「杭州西湖畔で」『文学青春群像』南北社、p.28.
45　小田嶽夫（1964）「郭沫若と郁達夫」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、p.207.
46　田中栄一（1999）「小田嶽夫論」『国文学　解釈と鑑賞』（64）、p.16.
47　新井幸子（2001）「理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響」（『心理学研究』（72）、pp.315 ～ 321）を参照した。
48　小田嶽夫（2000）「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房。
49　小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、pp.65—66.
50　小田嶽夫（1978）『回想の文士たち』冬樹社、p.25.
51　小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 1965、p.80.
52　小田嶽夫（2000）「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、p.26.
53　小田嶽夫（1965）「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房 p.134.
54　小田嶽夫（1964）『文学青春群像』南北社、p.19 － 20.
55　小田嶽夫（1934）「心境小説」『世紀』第一巻第八号、p.85.
56　小田嶽夫（1965）「杭州西湖畔で」『文学青春群像』南北社、1964 年、p.30.
57　小田嶽夫（2000）「雪明かりの熌」『三笠山の月』小沢書房、p.215.
58　倉橋彌一（1934）「同人雑誌に據る人々」『文藝首都』第二巻第十一号

59　1931 年に創刊した同人雑誌『世紀』を指すことである。
60　小田嶽夫（1964）「杭州西湖畔で」『文学青春群像』南北社 p.30.
61　小田嶽夫（1964）「青春の終り」『文学青春群像』南北社、1964 年、p.166.

へ　ウェンミン（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程）

The Significance of Oda Takeo's Personal Experience in Hangzhou

HE Wenmin

Oda Takeo, known as the winner of the Akutagawa prize in 1936, wrote his experience in Hangzhou in the book *Jōgai*. Therefore "Oda Takeo and Hangzhou" is a significant subject in the research on him. Some general conclusions, such as "Oda Takeo's original experience", "the start of literature", are common under this topic. However, these conclusions have few details to support them. This article looks mainly at his I-novels and essays about his experience in Hangzhou and his recollections of how he became a writer. As a government worker who dreamed to be a writer, Oda Takeo always felt excruciating because of the disparity between ideal and reality. In Hangzhou, Oda enjoyed its impressive views and was in relationships with two Chinese women. In the meanwhile, he also experienced Northern Expedition and Anti-Japanese sentiment. The life experience in Hangzhou changes his identity. And it also influenced his complicated perception of Chinese reality.